「かの平和なる物のひびきは」

明治文学における都会の色彩と音

Jean-Jacques ORIGAS (National Institute of Oriental Languages and Civilizations)

一　森鷗外『うたかたの記』　明治二十三・八

上

幾頭の獅子の挽ける車の上に、勢よく突立ちたる、女神バワリアの像は、先王ルウドヰヒ第一世が此凱旋門に据ゑさせしなりといふ。その下よりルウドヰヒ町を左に折れたる處に、トリエント産の大理石にて築きおこしたるおほいへあり。これバワリアの首府に名高き見ものなる美術學校なり。

校長ピロッチイが名は、をちこちに鳴りひゞきて、獨逸の國々はいふもさらなり、新希臘、伊太利、璉馬などよりも、こゝに來りつどへる彫工、畫工數を知らず。日課を畢へて後は、學校の向ひなる、「カッフエエ、ミネルワ」といふ店に入りて、珈琲のみ、酒くみかはしなどしておもひ／＼の戯す。こよひも瓦斯燈の光、半ば開きたる窓に映じて、内には笑ひさゞめく聲聞ゆるをり、かどにきかゝりたる二人あり。

先づ二人が面を撲つはたばこの烟にて、遽に入りたる目には、中なる人をも見わきがたし。日は暮れたれど暑き頃なるに、窓悉くあけ放ちはせで、かゝる烟の中に居るも、習となりたるなるべし。「エキステルならずや、いつの間にか歸りし。」「なほ死なでありつるよ。」など口々に呼ぶを聞けば、彼諸生はこの群にて、馴染あるものならむ。

「大人氣なしといひけたで聞き玉へ。謝肉（カルネワル）の祭、はつる日の事なりき。『ピナコテエク』の前出でし時は、雪いま晴れて、街の中道なる並木の枝は、一つ／＼薄き氷にてつゝまれたるが、今點ぜし街燈に映じたり。いろ／＼の異様なる衣を着て、白く又黒き百眼掛けたる人、群をなして往來し、こゝかしこなる窓には毛氈垂れて、物見としたり。カルヽの辻なる『カッフエエ、ロリアン』に入りて見れば、おもひ／＼の假裝色を爭ひ、中に雜りし常の衣もはえある心地す。

少女が側に坐したりし一人は、「われをもすさめ玉はむや、」といひて、右手さしのべて少女が腰をかき抱きつ。少女は「さても禮儀知らずの雛子どもかな、汝等にふさはしき接吻のしかたこそあれ。」と叫び、ふりほどきて突立ち、美しき目よりは稻妻出づと思ふばかり、しばし一座を睨みつ。巨勢は唯呆れに呆れて見居たりしが、この時の少女が姿は、菫花うりにも似ず、「ロオレライ」にも似ず、さながら凱旋門上のバワリアなりと思はれぬ。

少女は誰が飮みほしけむ珈琲碗に添へたりし「コップ」を取りて、中なる水を口に銜むと見えしが、唯一噀。「雛子よ、雛子よ、汝等誰か美術の雛子ならざる。フイレンチエ派學ぶはミケランジエロ、ヰンチイが幽靈、和蘭派學ぶはルウベンス、フアン・ディクが幽靈、我國のアルブレヒト・ドユウレル學びたりとも、アルブレヒト・ドユウレルが幽靈ならぬは稀ならむ。會堂に掛けたる『スツディ』二つ三つ、直段好く賣れたる曉には、われらは七星われらは十傑、われらは十二使徒と擬に見たてしてのわれぼめ。かゝるえり屑にミネルワの唇いかで觸れむや。わが冷たき接吻にて、滿足せよ。」とぞ叫びける。

吹掛けし霧の下なる此演說、巨勢は何事とも辨へねど、時の繪畫をいやしめたる、諷刺ならむとのみは推測りて、その面を打仰ぐに、女神バワリアに似たりとおもひし威嚴少しもくづれず、言畢りて卓の上におきたりし手袋の酒に濡れたるを取りて、大股にあゆみて出でゆかむとす。

下

定なき空に雨歇みて、學校の庭の木立のゆるげるのみ曇りし窓の硝子をとほして見ゆ。

國王の棲めりといふベルヒ城の下に來し頃は、雨彌々劇しくなりて、湖水のかたを見わたせば、吹寄する風一陣々、濃淡の竪縞おり出して、濃き處には雨白く、淡き處には風黑し。

日もはや暮れて、岸には「アイヘン」、「エルレン」などの枝繁りあひ蔭ごりて、水は入江の形をなし、蘆にまじりたる水草に、白き花の咲きたるが、ゆふ闇にほの見えたり。

時は耶蘇暦千八百八十六年六月十三日の夕の七時、バワリア王ルウドヰヒ第二世は、湖水に溺れて殂せられしに、年老いたる侍醫グツデンこれを救はむとて、共に命を殞し、顏に王の爪痕を留めて死したりといふ。おそろしき知らせに、翌十四日ミユンヘン府の騷動はおほかたならず。街の角々には黑縁取りたる張紙に、此訃音を書きたるありて、その下には人の山をなしたり。新聞號外には、王の屍見出だしつるをりの摸様に、さま〳〵の臆說附けて賣るを、人々爭ひて買ふ。點呼に應ずる兵卒の正服つけて、黑き毛植ゑたるバワリア兜戴ける、警察吏の馬に騎り、または徒立にて馳せちがひたるなど、雜沓いはんかたなし。

二　夏目漱石『カーライル博物館』　明治三十八・一

公園の片隅に通り掛の人を相手に演說をして居る者がある。向ふから來た釜形の尖つた帽子を被づいて古ぼけた外套を猫背に着た爺さんがそこへ歩みを佇めて演說者を見る。演說者はぴたりと演說をやめてつか〳〵と此村夫子のたゝずめる前に出て來る。二人の視線がひたと行き當る。演說者は濁りたる田舍調子にて御前はカーライルぢやないかと問ふ。如何にもわしはカーライルぢやと村夫子が答へる。チエルシーの哲人と人が言囃すのは御前の事かと問ふ。成程世間ではわしの事をチエルシーの哲人と云ふ樣ぢや。セージと云ふは鳥の名だに、人間のセージとは珍らしいなと演說者はから〳〵と笑ふ。村夫子は成程猫も杓子も同じ人間ぢやのに殊更に哲人抔と異名をつけるのは、あれは鳥ぢやと渾名すると同じ樣なものだのう。人間は矢張り當り前の人間で善かりさうなものだのに。と答へて是もから〳〵と笑ふ。

余は晩餐前に公園を散歩する度に川緣の椅子に腰を卸して向側を眺める。倫敦に固有なる濃霧は殊に岸邊に多い。余が櫻の杖に頤を支へて眞正面を見て居ると、遙かに對岸の往來を這ひ廻る霧の影は次第に濃くなつて五階立の町續きの下から漸々此搖曳くものゝ裏に薄れ去つて來る。仕舞には遠き未來の世を眼前に引き出したる樣に窈然たる空の中に取り留のつかぬ鳶色の影が殘る。其時此鳶色の奧にぽたり〳〵と鈍き光りが滴る樣に見え初める。三層四層五層共に瓦斯を點じたのである。

毎日の樣に川を隔てゝ霧の中にチエルシーを眺めた余はある朝遂に橋を渡つて其有名なる庵りを叩いた。

庵りといふと物寂びた感じがある。少なくとも瀟洒とか風流とかいふ念と伴ふ。然しカーライルの庵はそんな脂つこい華奢なものではない。往來から直ちに戸が敲ける程の道傍に建てられた四階造の眞四角な家である。

出張つた所も引き込んだ所もないのべつに眞直に立つて居る。丸で大製造場の烟突の根本を切つてきて之に天井を張つて窓をつけた樣に見える。

カーライル云ふ。裏の窓より見渡せば見ゆるものは茂る葉の木株、碧りなる野原、及びその間に點綴する勾配の急なる赤き尾根のみ。西風の吹く此頃の眺めはいと晴れやかに心地よし。

余は茂る葉を見樣と思ひ、青き野を眺め樣と思ふて實は裏の窓から首を出したのである。首は既に二返許り出したが青いものも何にも見えぬ。右に家が見える。左りに家が見える。向にも家が見える。其上には鉛色の空が一面に胃病やみの樣に不精無精に垂れかゝつて居るのみである。余は首を縮めて窓より中へ引き込めた。—

カーライル又云ふ倫敦の方を見れば眼に入るものはエストミンスター、アベーとセント、ポールズの高塔の頂きのみ。其他幻の如き殿宇は煤を含む雲の影の去るに任せて隱見す。

「倫敦の方」とは既に時代後れの話である。今日チエルシーに來て倫敦の方を見るのは家の中に坐つて家の方を見ると同じ理窟で、自分の眼で自分の見當を眺めると云ふのと大した差違はない。然しカーライルは自ら倫敦に住んで居るとは思はなかつたのである。彼は田舍に閑居して都の中央にある大伽藍を遙かに眺めた積りであつた。余は三度び首を出した。そして彼の所謂「倫敦の方」へと視線を延ばした。然しエストミンスターも見えぬ、セント、ポールズも見えぬ。數萬の家、數十萬の人、數百萬の物音は余と堂宇との間に立ちつゝある、漾ひつゝある、動きつゝある。

カーライルは何の爲に此天に近き一室の經營に苦心したか。彼は彼の文章の示す如く電光的の人であつた。彼の癇癖は彼の身邊を圍繞して無遠慮に起る音響を無心に聞き流して著作に耽るの餘裕を與へなかつたと見える。洋琴の聲、犬の聲、鷄の聲、鸚鵡の聲、一切の聲は悉く彼の鋭敏なる神經を刺激して懊惱已む能はざらしめたる極遂に彼をして天に最も近く人に尤も遠ざかれる住居を此四階の天井裏に求めしめたのである。

斯の如く豫期せられたる書齋は二千圓の費用にて先づ〳〵思ひ通りに落成を告げて豫期通りの功果を奏したが之と同時に思ひ掛けなき障害が又も主人公の耳邊に起つた。成程洋琴の音もやみ、犬の聲もやみ、鷄の聲、鸚鵡の聲も案の如く聞えなくなつたが下居に居るときは考だに及ばなかつた寺の鐘、汽車の笛偖は何とも知れず遠きより來る下界の聲が呪の如く彼を追ひかけて舊の如くに彼の神經を苦しめた。

聲。英國に於てカーライルを苦しめたる聲は獨逸に於てショペンハウアを苦しめたる聲である。ショペンハウア云ふ。「カントは活力論を著せり、余は反つて活力を弔ふ文を草せんとす。物を打つ音、物を敲く音、物の轉がる音は皆活力の濫用にして余は之が爲めに日々苦痛を受くればなり。音響を聞きて何等の感をも起さゞる多數の人我說をきかば笑ふべし。去れど世に理窟をも感ぜず思想をも感ぜず詩歌をも感ぜず美術をも感ぜざるものあらば、そは正に此孤なる事を忘るゝ勿れ。彼等の頭腦の組織は麁獷にして覺り鈍き事其源因たるは疑ふべからず」カーライルとショペンハウアとは實に十九世紀の好一對である。余が此の如く回想しつゝあつた時に例の婆さんがどうです下りませうかと促がす。

一層を下る每に下界に近づく樣な心持ちがする。冥想の皮が剝げる如く感ぜらるゝ。階段を降り切つて最下の欄干に倚つて通りを眺めた時には遂に依然たる一個の俗人となり了つて仕舞つた。

三　永井荷風　『日和下駄』　大正三・八―四・六『三田文學』掲載
大正四・十一、籾山書店刊

第九　崖

昔から市内の崖には別にこれという名前のついた処は一つもなかったようである。『紫の一本』その他の書にも、窪、谷なぞいう分類はあるが崖という一章は設けられていない。しかし高低の甚しい東京の地勢から考えて、崖は昔も今も変りなく市中の諸処に聳えていたに相違ない。

小石川春日町から柳町指ケ谷町へかけての低地から、本郷の高台を見る処々には、電車の開通しない以前、即ち東京市の地勢と風景とがまだ今日ほどに破壊されない頃には、樹や草の生茂った崖が現れていた。根津の低地から弥生ケ岡と千駄木の高地を仰げばここもまた絶壁である。絶壁の頂に添うて、根津権現の方から団子坂の上へと通ずる一条の路がある。私は東京中の往来の中で、この道ほど興味ある処はないと思っている。片側は樹と竹藪に蔽われて昼なお暗く、片側はわが歩む道さえ崩れ落ちはせぬかと危まれるばかり、足下を覗くと崖の中腹に生えた樹木の梢を透して谷底のような低い処にある人家の屋根が小さく見える。されば向は一面に遮るものなき大空かぎりもなく広々として、自由に浮雲の定めなき行衛をも見極められる。左手には上野谷中に連る森黒く、右手には神田下谷浅草へかけての市街が一目に見晴され其処より起る雑然たる巷の物音が距離のために柔げられて、かのヴェルレエヌが詩に、

かの平和なる物のひびきは
街より来る……

といったような心持を起させる。

第十　坂

前回記する処の崖といささか重複する嫌いがあるが、市中の坂について少しく述べたい。坂は即ち平地に生じた波瀾である。平坦なる大通は歩いて滑らず躓かず、車を走らせて安全無事、荷物を運ばせて賃銀安しといえども、無聊に苦しむ閑人の散歩には余りに単調に過る。けだし東京市中における眺望の一直線をなす美観は、橋あり舟ある運河の岸においてのみこれを看得るが、銀座日本橋の大通の如き平坦なる街路の眺望に至っては、われら不幸にしていまだ泰西の都市において経験したような感興を催さない。西洋の都市においても私は紐育の平坦なるFifth Avenue よりコロンビヤの高台に上る石級を好み、巴里の大通よりも遥にモンマルトルの高台を愛した。里昂にあってはクロワルッスの坂道から、手摺れた古い石の欄干を越えて眼下にソオンの河岸通を見下しながら歩いた夏の黄昏をば今だに忘れ得ない。

その頃私は年なお三十に至らず、孤身飄然、異郷にあって更に孤客となるの怨なく、到る処の青山これ墳墓地ともいいたいほど意気頗る豪なるところがあったが今その十年の昔と、鬢髪いまだ幸にして霜を戴かざれど精魂漸く衰え聖代の世に男一匹の身を持てあぐみ為す事もなき苦しさに、江戸絵図を懐中に日和下駄曳摺って、既に狂歌俳句に読古された江戸名所の跡を弔い歩む感慨とを比較すれば、全くわれながら一滴の涙なきを得ない。さりながら、かの端唄の文句にも、色気ないとて苦にせまい賤が伏家に月もさす。徒に悲み憤って身を破るが如きはけだし賢人のなさざる処。われらが住む東京の都市いかに醜く汚しというとも、ここに住みここに朝夕を送るかぎり、醜き中にも幾分の美を捜り汚き中にもまた何かの趣を見出し、以て気は心とやら、無理やりにも少しは居心地住心地のよいように自ら思いなす処がなければならぬ。これ元来が主意というものなき我が日和下駄の散歩の聊か以て主意とする処ではないか。

偶成

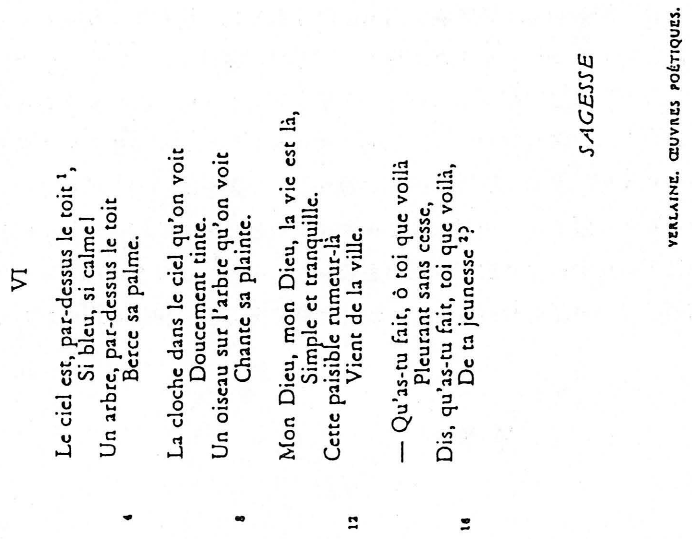
ポオル・ヴエルレエン

空は屋根のかなたに
　かくも静にかくも青し。
樹は屋根のかなたに
　青き葉をゆする。

打仰ぐ空高く御寺の鐘は
　やはらかに鳴る。
打仰ぐ樹の上に鳥は
　かなしく歌ふ。

あゝ神よ。質朴なる人生は
　かしこなりけり。
かの平和なる物のひゞきは
　街より来る。

君、過ぎし日に何をかなせし。
　君今こゝに唯だ嘆く。
語れや、君、そもわかき折
　なにをかなせし。



VERLAINE. ŒUVRES POÉTIQUES.

SAGESSE

VI

Le ciel est, par-dessus le toit [1],
Si bleu, si calme!
Un arbre, par-dessus le toit
Berce sa palme.

La cloche dans le ciel qu'on voit
Doucement tinte.
Un oiseau sur l'arbre qu'on voit
Chante sa plainte.

Mon Dieu, mon Dieu, la vie est là,
Simple et tranquille.
Cette paisible rumeur-là
Vient de la ville.

— Qu'as-tu fait, ô toi que voilà
Pleurant sans cesse,
Dis, qu'as-tu fait, toi que voilà,
De ta jeunesse [2]?

金子光晴と上海

劉　建輝（南開大学）
Liu Jian Hui

1926年、金子光晴は妻・三千代を携えて上海を訪れる。そこで彼は「私たちのあいだで通用するのとは全く別なモラルがあること」を知り、「むごたらしい」現実を発見する。以後、二回目の上海行とその後の五年間の海外放浪を挟んで彼の詩の世界は大きく変質する。観念的な美意識の殻から抜け出し、現実直視、現実「活写」への転向である。従来の金子論は往々にして詩人のこの変化の理由をそのヨーロッパ体験に求め、ラディカルな自己とエトランジェの目の獲得を指摘する。しかし後年、この時期の海外体験を回想するに際して金子自身も「七年にわたる長旅」と表現しているように、ヨーロッパの前に三回にわたる上海行とそこでの様々な体験が明らかにその後の変化の方向を決定するものとして認識されるべきである。今回の発表は従来きわめて重要だと認識されながらも具体的な考察が疎かにされてきた詩人のこの上海体験について詩集「鱶沈む」、回想録「どくろ杯」などを手がかりに追跡する。そして上海において詩人がどのようにこの「魔都」を受けとめ、またこの特殊な空間との出会いを通じていかにして自分の詩的感覚を観念的デカダンスから感覚的デカダンスへと変貌させたかについて、そのプロセスの解明を試みる。